社說

風紀取締の厲行

風紀取締に就ては世間に喋々の議論少なからず近來その筋にても頻りに注意し面倒なる警察令など發して表面は甚だ嚴重なるに似たれども裡面の醜態は依然舊の如くにして當局者が風紀云々とて世話を燒く其割合に實の擧らざるは我輩の解せざる所なり風紀取締とは漠然たる辭なれども目下の實際は詰り彼の藝妓の輩が本藝の傍に賣淫を事として風俗を害する其醜行を取締るの意味に外ならざるが如し抑も藝妓と娼妓とは均しく男客を相手にする商賣にして其性質稍や似寄りたるものゝ如くなれども本來娼妓は淫を賣り藝妓は藝を賣るものにして其間に判然たる區別あるは何人の眼にも明白なる所なり娼妓の賣淫は恰も公然賊行を行ふものにして人類の事としては殆んど言ふ可らざるの醜態なる筺は其上に黴毒傳染を媒介するの危險さへ免かれず旁々以て如何にも堪へ難き次第なれども近來娼妓の取締は相應に行屆き且つ檢黴法も頗る勤勉して實際に病毒傳染の害甚だしからずと云ふ又其營業は所謂る賤業にして道德の眼を以てすれば醜態不潔見るに堪へずと雖も如何せん今の不完全なる社會に於ては自から欠く可らざるの事情あるのみならず寧ろ實際の必要として認めざるを得ず世間或は風紀道德を云々して廢娼論を主張するものあれども我輩は論者と全く正反對にして經世上より其存在の止む可らざるを斷言するものなり然るに藝妓なるものは其目的藝にありて娼妓とは全く別なれども今の世間は俗物の寄集りにして其俗社會に於ける殺風景なる俗交を融和するの點に於ては亦自から効能なきに非ず滔々たる世人は悉く哲學者に非ず躬利獵益に熱心奔走して殆んど忙殺されんとする其忙中に一夕の閑を偸み一種の佳人を聘して歌絲管絃に耳目を娛ましむるが如き亦是れ俗情の快樂とする所なれば世事多忙の俗界に於ては自から藝妓の必要あるに相違なけれども其藝妓が其名の如く藝を主として眞實本業を守るものとては極めて少なく實際に藝は附たりにして醜穢の擧動を憚からざる有樣なりと云ふに至りては實に沙汰の限りにして決して許す可らざるものなり彼の妓樓は芳原洲崎の如く廓を成し又は品川新宿等の如く宿を成して區域に一定の限りある其上に取締も甚だ嚴重にして娼妓の一身は殆んど自由を束縛さるゝものなるが故に自から醜風を外に傳ふるの憂なけれども藝妓に至りては市中の隨處に軒を並べて市民と雜居するのみか如何なる場所にも出入自在にして是を弄ばんとする輩に取りては其便宜娼妓と同日の談に非ず近來は紳士なと稱する輩を始めとして坊間に出没して此種の快樂を求ひるもの次第に多き由にて警風紀に行はるゝに隨て警察の仕事は勢ひ免かる可らず現に其筋行きすゝ〳〵厳たしく警部の說に據れば著しも今日の儘に捨て置くときは警察官の增加は多々際限なくして到底所期の効能なきに至る可しと云ふ本來の商賣に到給たる藝妓なるにも拘らず藝妓は其本業を外れて醜業を專にするとありては取も直さず娼妓の上前を取るものにして娼妓より見れば花柳不相合のみならず藝妓の仕事を侵がし風紀の紊亂を致す其害は決して公娼の比に非ず容易ならざる次第なりと云ふ可し左れば藝妓が實際に賣淫を事とする事實ある上は斷然同樣の取扱をも爲すみと至當なれども夫れも容易に行ふ可らずとならば現行法に隨ひ密賣淫の取締を嚴重にして苟も犯すものは片端より搦々と處分す可し實際に其擧を防ぐに決して困難はなき筈なるに然るに當局者は明に右の事情を承知しながら其處分を等閑にし單に風紀を云々するのみにして毫も事の實を擧げざるは何ぞや當局者にして果して實を擧げんとならば區々たる手段は止めにして飽現行の法を嚴重に施行して懼からざるに在るのみ我輩の勸告する所なり

○上海特報

九月四日　上海特派員　松尾久男

●製造業の課稅と上海商業會議所　清國は財源を求むるに急にして或は所得稅を課せんとし或は厘金を問來る丈け擴張せんとし或は海關の取扱を嚴にせんとし百方研究の末各地の製造業を調査して課稅せんと試み總理衙門は之を上奏しければ上海の商業會議所は直に會議を開きて其可否を議し意見を具して北京なるデンビー米公使に上申し其權力を以て此の議を中止せしめんと企圖せりと云ふ偖會議は八月二十六日を以て開かれ議長アルフォルド氏以下六名の委員列席せり議長は總理衙門の奏文即ち絹絲紡績、綿絲紡績業に課稅するの上奏書を朗讀し種々協議の後決議せる其略に云ふ今回清國政府の實行せんとする課稅は厘金若しくは之に類する稅金に代らしめんとの意にして絹織編織の機械に依りて製作せらるゝものは之を輸出するに當り從前の五分稅に倍する稅を課せんとするものなり尤も此稅金を仕拂ふたる後は厘金を免除せらるゝが故に內地に入るに當りては幾分の利益はあれども此計畫が當地の綿絲紡績に與ふる影響は實に甚だしきものあるべし當會議所は尙ほ現に着手しつゝある製造家の意見に從ひ重ねて會議を開く積りなり而して其絹絲紡績は內地に入るもの殆んど皆無にして盡く歐洲及び米國に出づるものなるが故に更に研究を要すべし清政府今回の處置は從價稅一割を課せんとするものにして現時の白絲には一ピコルに付十兩、黃絲には七兩、野繭絲には五兩の從量稅に比して實に七分より八分五厘の增稅なり若し此如き課稅を實施せば支那に於ける絹絲紡績事業は著しく衰頹して他の競爭國は益々利益を得、支那絹絲業は失ふに至らん加ふるに本年繭買入れの時に於て外人は斯る計畫あるを知らず從來の標準を以て買入れたるを以て若し此課稅を實行せらるゝに於ては大損失なきを得ず之を要するに當會議所は全然此計畫に反對するを以て閣下が此旨總理衙門に通報するの勞を採られん事を望ひ云々

●原林平、植內頑次郎兩氏の遭難　日清戰爭の際福原、植內の二氏は軍事探偵として支那に於て慘酷の刑に處せられしが此頃我政府は其遭難の引渡しを清政府に要求し清國政府は劉坤一に命じて其捜索を爲さしめしが二氏の屍は金陵城外小校場の西方に埋葬しありて墓碑にも日本人云々の文字ありし由にて此頃之を發掘し更に棺を製して丁重に收殮し以て我官吏の請取るを俟ち居ると云ふ聲きには千秋の感を遺して空しく天津郊外に橫はりし石川伍一氏の遺骸を本國に還送し今又金陵城外に魂魄遠ふ二氏の遺體を故山に改葬せんとす三氏亦以て瞑すべきなり

●天津の暴雨と芦漢鐵道　立秋以來天津は鬼角雨勝ちにして去る清曆七月三四兩日の如きは大雨連り に至り高陵村及び碳北各村莊皆水を被り天津の如きも非常の被害あり折角の鐵道工事も破損の場所多く武清縣所屬の堤岡の水の爲めに決潰數十丈に亘りたれば鐵道總辦胡橋菜は人を派して其狀況を視察せしめたりと云ふ

●蘇杭居留地問題　支那新聞の報ずる所に依れば蘇州開港せらるゝや支那の官吏は閶門外青旗地一帶を以て日本居留地となさんとし我政府は閶門外の西濠山塘より閶門外の五龍橋邊に定めんとし再三掛合も清官吏之を聞かず漸く閶門外に地を擇び一馬路を造りて以て往來に便にせんとの議に決せりと又云ふ杭州にありては拱宸橋外に居留地を定め既に道路の修築に從事せるも未だ成功せず此頃我領事は蠶布政使に會して土地狹ければ拱宸橋內に地址を擴めんとして議合せず蠶汪議を去らんとまで決心せしも應巡撫之を慰めて漸く辭職を思止まらしめ我領事には地區を擴むるの議は商務振興を開きて其可否を議し意見を具して北京なるデンビー米公使に上申し其權力を以て此の議を中止せしめんと企圖せりと云ふ偖會議は八月二十六日を以て開かれ議長アルフォルド氏以下六名の委員列席せり議長は總理衙門の奏文即ち絹絲紡績、綿絲紡績業に課稅するの上奏書を朗讀し種々協議の後決議せる其略に云ふ今回清國政府の實行せんとする課稅は厘金若しくは之に類する稅金に代らしめんとの意にして絹織編織の機械に依りて製作せらるゝものは之を輸出するに當り從前の五分稅に倍する稅を課せんとするものなり尤も此稅金を仕拂ふたる後は厘金を免除せらるゝが故に內地に入るに當りては幾分の利益はあれども此計畫が當地の綿絲紡績に與ふる影響は實に甚だしきものあるべし當會議所は尙ほ現に着手しつゝある製造家の意見に從ひ重ねて會議を開く積りなり而して其絹絲紡績は內地に入るもの殆んど皆無にして盡く歐洲及び米國に出づるものなるが故に更に研究を要すべし清政府今回の處置は從價稅一割を課せんとするものにして現時の白絲には一ピコルに付十兩、黃絲には七兩、野繭絲には五兩の從量稅なり若し此如き課稅を實施せば支那に於ける絹絲紡績事業は著しく衰頹して他の競爭國は益々利益を得、支那絹絲業は失ふに至らん加ふるに本年繭買入れの時に於て外人は斯る計畫あるを知らず從來の標準を以て買入れたるを以て若し此課稅を實行せらるゝに於ては大損失なきを得ず之を要するに當會議所は全然此計畫に反對するを以て閣下が此旨總理衙門に通報するの勞を採られん事を望ひ云々

●原林平、植內頑次郎兩氏の遭難　日清戰爭の際福原、植內の二氏は軍事探偵として支那に於て慘酷の刑に處せられしが此頃我政府は其遭難の引渡しを清政府に要求し清國政府は劉坤一に命じて其捜索を爲さしめしが二氏の屍は金陵城外小校場の西方に埋葬しありて墓碑にも日本人云々の文字ありし由にて此頃之を發掘し更に棺を製して丁重に收殮し以て我官吏の請取る

後篇

女武者

わかば

第十二回　衛士の怪力

世にも飽き人をも拚て、廣き浮世に只一人の、なつかしき人の心さへ頼み難ければ、清水の冠者はつく〳〵世の味氣無きを打ち觀じ、百事意の如くならざる處に東肥谷資會社員の來泛　東肥合資會社員緒方二三、深水十八、外一名神戸丸便にて來滬し內二人は昨日滬口に向ふて出發せり聞く會社に於ては今度滬口に於て新事業を起す目論見にて今回來滬したる三氏は其用務を夫々命令を下して其地區を撰定しむると云ふ驚きに軍艦急にして一時の救窮法として案出したる厘稅法は今や更に其規模を擴張せんとす恐くは其擧に堪へざるべし

冠者は餘りの事に呆然たりしが、上臈は目聞くも枝にかけたる衣打ち見やりて。

「みは我夫の狩衣此太刀も正しく夫、偖は此池に」と、衣を抱いて泣きくづるゝは、紛れもわらぬ我妻鶴姫、夢か現か幻かと、冠者は心を奪はれしが、先づ爲す樣を見んものと、伺も呼吸を殺して覗ふるものなら、上に着たる婆は御身の妻にあらず、鬢ひ玉ふるものを、鬢ひ玉ふ人々の亡き魂が吾を導き此處に至らしめしものならば、兎ても死すれて婆も飽るゝ安養淨土の彼枝に打かけ、やとて、口に道まく習の水き足音聞えて見咎められて、なるまゝに、無き此崖を志遂し見れば、一夜目にも夫と匂かなる、花の顏愁ひを帶び梨花一枝、雨を帶びたる海棠の、婆も軟氣の少婦なるが、年も二八の上臈、婆は神仙の羽化したるかと怪まる。

冠者は餘りの事に呆然たりしが、上臈は目聞くも枝にかけたる衣打ち見やりて。

「みは我夫の狩衣此太刀も正しく夫、偖は此池に」と、衣を抱いて泣きくづるゝは、紛れもわらぬ我妻鶴姫、夢か現か幻かと、冠者は心を奪はれしが、先づ爲す樣を見んものと、伺も呼吸を殺して覗ふるものなら、上に着たる婆は御身の妻にあらず、鬢ひ玉ふるものを、鬢ひ玉ふ人々の亡き魂が吾を導き此處に至らしめしものならば、兎ても死すれて婆も飽るゝ安養淨土の彼枝に打かけ、やとて、口に道まく習の水き足音聞えて見咎められて、なるまゝに、無き此崖を志遂し見れば、一夜目にも夫と匂かなる、花の顏愁ひを帶び梨花一枝、雨を帶びたる海棠の、婆も軟氣の少婦なるが、年も二八の上臈、婆は神仙の羽化したるかと怪